

特251  
899

日本を中心とする東亞共榮圈内の  
石炭問題に就て (講演速記)

石渡信太郎

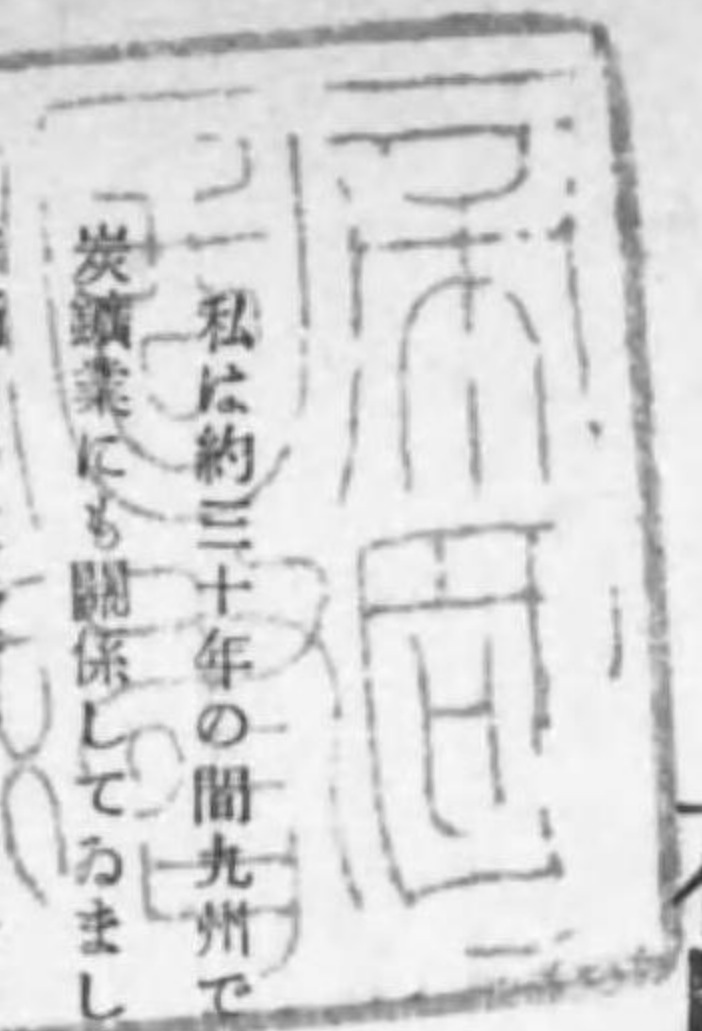


始



# 日本を中心とする東亞共榮圈内の 石炭問題に就て

石 渡 信 太 郎



私は約三十年の間九州で石炭掘りをやつて居り、其間に歐米各國の石炭の模様も見に行き、朝鮮、滿洲、支那方面の石炭産業にも關係してゐましたので、石炭の事なら一通り解つたつもりでゐたのであるが、十三年前奇妙な病氣に罹り、右肺摘出の手術を受けたので現役を勇退して豫備兵——豫備兵といふよりも寧ろ廢兵に近いやうな體になつて居るのであります。それで今は日本刀の研究に専念し、中央刀劍會の一役員として鑑刀報國に御奉公をしており、石炭の方は日本鑛業會と燃料協會と石炭統制會に關係のあるところから、主として人の話や人の書いたもので知識を得ておるのであります。石炭鑛業の現役の大家とは太刀打ちは出來ないが、我が國石炭の將來の對策といふことについては、横から見て心配にたへぬ點がありますので、愚見のあるところの一端を述べて、皆様から御遠慮ない御批評なり御訂正を願ひたいと思ふのであります。

石炭、鐵、石油に於て持たざる國日本は忠勇なる皇軍將士の奮闘によつて今日は東亞共榮圈の盟主として持てる國となりつゝあるのである。鐵、石油は論外として石炭について申すなれば、吾々の欲する種類の石炭は東亞共榮圈内を通じて

丁度うまい具合にあるのでありますから、此實といふことを考慮に入れて出来得るだけ大量を内地に持つて來ることが肝要である。これが我が國の石炭對策の根本ではないかと思ふのであります。私の石炭掘りを致しましたのは明治三十三年から昭和三年の末迄であります。其間に我が國內の石炭産額は壹千萬尾から三千万尾強へと約三倍の増産となつております。無論其後も増産はしてゐるが、其時代が正に我が國の石炭の全盛期と申してよいかと存じます。此全盛期中において我が國は大正十一年と十二年の中頃を分水嶺として、石炭の輸入超過國となつたのである。その以前は御承知の通り我が國の石炭は重要な輸出品であつて、大正二年には輸出が四百萬尾に近い數量に達したこともありませう。其頃の御得意先は主としてシンガポール、マニラ、上海、香港等であつたが、大正十二年になりますと輸出は減じて一五七萬尾となり一方輸入は増加して一六五萬尾となつて約八萬尾の輸入超過になつたと記憶しております。これが今日では約百倍の輸入及び移入を仰いでも尙足らぬといふので、ここに當局の苦心があると思ふのである。すなはち國內の石炭の増産はあつても、國內需要の増進率の激しきたるに供給が追付かぬのであります。そこでこれから先、我が國の石炭問題は果してどうなるかといふことが吾々横から見ても非常に氣になるので、如何に廢兵と雖も黙居することが出来ぬのであります。

この前の世界大戰の時にドイツは燃料問題と食料問題では随分困つた。また講和條件でも聯合國から非常に慮められたドイツは鐵礦の豊富なるアルサス、ローレンを佛に奪ひ返されたことも、莫大なる償金を支拂されたことも、世界各地の殖民地を奪はれたことも、東洋發展の根據地青島を日本に渡すことも、十年間佛、白、伊等に毎年三千五百萬尾の石炭供給の強制命令をうけたことも、皆これ止むを得ざることをして觀念したのであります。石炭の大産地オバーシレジャの大半を波蘭に割譲すべく強いられたことに向つては、ドイツは國を擧げて半狂亂の態となり大騒ぎであつて、オバーシレジャを奪はるゝくらゐなれば、ドイツは再戦して滅亡したほうがよいとまで極論した政治家も多かつたといふことを聞

てゐる。

これは今から二十三年前のことでありませうが、其頃の我が國の石炭界はどうであつたかといふに、一ヶ年に約三千万尾を産出しておつた。これが前に述べた通り僅か一二年にして我が國は石炭において輸入超過國となつてしまつたのである。鐵礦は御承知の通り其以前から殆んど全部が輸入である。油も御承知の通りであつたので、當時吾々はドイツを例として色々のことを考へさせられた。實際のところ其當時は汽車、汽船、軍艦の燃料は主として石炭と練炭とであつたため油問題は今日ほど重要視されなかつたが、鐵と石炭について我國の將來はどうなるかと憂ふる餘り、私は「我國將來の石炭と鐵の需給を論ず」なる一文を草して發表したことがある。殊に私は石炭人として其當時から我が國の石炭産出に向つては重大なる責任を感じてゐたのであります。其後の我が國內の石炭の生産状況は多少の波亂はあつたけれども、大體に於て順調に増産し來り昭和十二年には約四千五百萬尾に達し、尙其後も累年増産を續けて茶ておりますが、今日我石炭鑛業の實狀からすれば、あまり將來を樂觀することは許されぬ、寧ろ悲觀の材料が多いのであります。そうして一方の國內消費は殆んど一直線に近いカーブで増進してゆきます。そうすると今後十年したなれば、丁度今日の國內産額と同量ものを移入または輸入に需めなければならぬといふことは、動かすことが出来ぬかと思ひます。従つてこの移輸入なくしては、我が國運の發展は困難になるといふことは申上げるまでもないと思ふのであります。現在官民一致して石炭増産の奨励もやり、開掘新起業の計畫もあるやうであります。今日の現狀に處しつゝ、一方に於て十年先の我が石炭をどうするかといふことに向つては、未だ確固たる大方針が樹立されてゐないかの如く感ずるのであります。

此現狀に處しつゝ、將來の石炭對策を如何にして樹立するかといふことについては吾々老輩としても憂ふるところがありますので、一昨年來驚馬に鞭ち、日本鑛業會主催の石炭増産對策研究會に参加して、當局に具申書を提出しました。或る

時は前鐵道大臣井上匡四郎子爵を介して前商工次官小島氏に、或る時は松本石炭聯合會の會長、今の石炭統制會々長に又満洲の石炭鑛業の大元締たる鮎川満洲重工業總裁に、或る時は舊友結城日本銀行總裁に、或る時は大政翼賛會關係の二三の有力なる方々に、或は企畫院、興亞院、燃料局の幹部級の知己其他の方面に向つて、私の考へてをわが國の石炭に就ての現在及び將來の對策の一端を申述べ、尙これよりさき「石炭時報」の昭和十二年號に『我國將來の石炭需給問題に就ての側面觀』として愚見を開陳し、次で昭和十四年號並びに昭和十六年の日滿支石炭時報新年號にも意見のあるところを開陳したのでありますが、私の體當りに率直に申述べた意見の一部は——私の意見といふわけではありますまいが——私の申述べたやうになつて來るやうである。然しまだなかなか私の意見と一致せぬところのあるのを残念に思つてをるのであります。

率直に申しますと、日本は最早や、はつきりと石炭の輸入國になつてゐるのだといふことを自覺せねばならぬのである。これは世界何れの國でもさうであるが、國運の隆々として發展する時代には、石炭にせよ、鐵にせよ、一旦輸入國となつたら容易には再び輸出國にはならぬことは明かでありまして、我國も其例にもれず、今後永久鐵礦と石油と石炭は大輸入國たる運命をもつておるのであります。しかも其輸入量は年一年と増加すると云ふことは極めて明かなることである。鐵の石油のことはここに略することにして、石炭だけに就て申すなれば、我國としては既に早く石炭國策樹立の必要があつたのであります。此事に就ては不肖の私であつたけれど、我が國が石炭輸入超過國となつた當時に於て石炭問題の將來を憂ひまして、大正十三年に燃料協會理事として大阪において「我が國將來の石炭問題に就て」と題して講演し、其二、三年前には日本鑛業會の主催で同じやうな問題で朝鮮と滿洲で講演致しました。要は石炭は將來國內に依存出來ない、どうしても樺太、滿洲、支那の石炭を開發してこれを貰はねばならぬ。撫順は餘り急いで大増産をするに及ばぬ、近き將來内地

で石炭の不足する場合に助勢して貰はねばならぬといふやうなことを申したやうに記憶しております。尙大阪の講演に於ては支那全土の埋藏炭量を推算して二千五百九十二億噸として發表したのであります。夫れは其頃の西洋人の調査炭量一兆三千七十九億噸、我が國地質調査所長井上博士の調査炭量六千億噸に對し遙かに少量であつたが、今日の支那（滿洲を含まず）の埋藏炭量に就ての各方面の意見は大體二千五百萬噸内外に一致して居るので、私の當時の推算はまぐれ當つたわけでありませう。尙また私は此講演に於て次の様に述べて居ります。我國は今日にて支那と石炭鑛業の共同經營所謂合辦事業をなす事が必要である。これは支那の鑛業法からしても出來る事になつて居る。然るに現今の支那は此合辦事業をなすことを以て自國の利權を日本に奪はれたかのやうな感を抱く者あり、我國人亦合辦事業の成立を以て利權を獲得したかのやうに高言するものも狀態では甚だ遺憾である。支那は地下深き所に埋もれたる石炭を死物たらしめず、これを開發採掘して地上に出し、廣く人類のため利用するを以て社會に對する大なる義務と思はざるべからず。而してこれに要する技術及資金は我が國に仰ぎ自國の勞働者を使役して、自國の民福を計り、石炭採掘及利用により得たる利潤を相互に分配すべきである。今日では不幸にして失脚の位置にあるが、支那の政治家にして財政上の大手腕ある彼の梁士紹氏の如き、我國の技術者の手腕をよく知つてをる人である。又彼の孫逸仙氏の如き、先頃迄は盛んに日本を惡口し、同氏を最も懇切に眞心を以て世話したことのある九州の人士をして、彼は忘恩犬にひとしきものとまで憤怒させたが、同氏も近來支那は東洋に於て是非日本と提携しなければ支那の堅實なる發達は出來ぬものであるとの考を有せらるゝに至つたとのことである。私は是等具眼の士が支那の政界及實業界に段々増して、日支合辦の鑛山事業がどしどし出來ることを希望するものである。又我が國の資本家も私利私慾を捨て、少しく大きな頭腦を以て奮發を要するものと思ふ。私は我國が支那山西炭を輸入するの必要を感ずるの時期は今後十五年を待たずして來るものと確信するものである。云々（當時の原稿のまゝ）

當時私の如き若輩の申す事は野人の寢言として官民當局には大なる反響を興へる事は出来なかつたのでありますが、實は我が國としては此頃からして確たる燃料國策を樹立する必要があつたのであります。

これから後十年を経ずして滿洲事變が起つた。此御蔭で滿洲國の石炭は全部日本の力で掘れるやうになつた——此時に於て改めて日滿を通じたる石炭對策が建てられねばならなかつた。即ちこゝで我が石炭國策の建て直しをすべき時機に到達したのであります。滿洲國の建設十年にして石炭産額は既に内地の半に近づきつゝあるのであるが、其採掘炭は全部滿洲國內で費つてしまつて、こちらにはやれないといふことでは困るのである。これは今日迄日滿を通じた本當の石炭對策が出来てゐないからだと思ふ。

此滿洲事變に次いで支那事變が起り、これによつて吾々が一番熱望した蒙疆及び北支に向つて我が手を充分伸ばせるやうになつたのでありますから、我國としては茲に三轉して日滿支を通じた石炭國策がでて來なければならぬと思つたのであります。

さうして今日には忠勇武烈なる皇軍のお蔭で、豫想より早く南洋方面に手を伸せるやうになり、東亞共榮圈の基礎が確立せられつゝあるに及んで我が國は日、滿、支の他に南洋を加へた——私は近く滿洲は勿論のこと印度の石炭にも手を伸ばすことゝなると思ふのであるが——此大東亞の石炭といふことゝ東亞の盟主日本の國內消費といふことを脱み合せ、愈々ここに確かりした石炭國策がでて來なければならぬと考へてをるのでありますから、此際滿洲が俺のところでは石炭は澤山出るが、出るだけは全部自分でつかつてしまふ、内地にはやれぬといふやうな聲を聴かされては困る、なるほど今は滿洲でも石炭は不足かも知れぬが將來の増産に向つては、内地のことを考へて貰はねばならぬのである。滿洲の石炭の權威久保博士の近著「東亞の石炭方策」の中にも滿洲の石炭は將來も内地にはやれぬだらうと述べてをられますが

これではいかね、其やうな事は近く日本を中心とした所謂大東亞共榮圈の石炭需給對策が確立される際に篤と御相談を願ひたいのである。

然らば日本を中心とした大東亞共榮圈の石炭需給對策は如何といふに、私は我が國が此石炭對策を確立するには先づ第一に石炭問題について朝野の本當の理解を得るといふことが肝要だと思ふのである。先刻もちよつと申しました大正十三年の大阪に於ける燃料協會の講演の最後に、私は次の如く述べてゐる。

「今日の我が國の燃料問題は唯だ其消費者と供給者及びこれに關係あるところの一部の人の問題に非ずして、實に國家にとつての重大問題である。今に於て國家としてこの燃料問題を研究解決するに非れば、將來國家産業の上に一大事を醸すに至るや明かである。然るに朝に立つ官吏、野にある政黨、實業に従事する人々の中、特別の關係ある或る一局部の人士の外、此重大なる燃料問題について理解する所なきは誠に遺憾であると言はねばならぬ。(中略)。政府は今少し眞面目に此問題に着眼し、我が國にける燃料調査會を一日も早く設立し、本問題の解決に向つて猛進せらるゝことを切望するのである。また政黨としても政權の爭奪を唯一の目的とせず、今少し國家の産業といふことに着眼研究せられたいのである。要するに此燃料問題殊に我が國將來の石炭問題に就ての研究解決は一日も忽にするを許さず、その朝にあると野にあるとを問はず、協力一致充分の理解を以て、此問題を處せられん事を熱望してやまぬ」云々。

然るに其後二十年、石炭國樹立の要今日より急なるはなき時に於て、未だに石炭問題に就て理解なき方面のあるのは残念至極である。最近燃料問題に關する或る會議の席で、石炭の配給其他に關係ある幹部のあるかたが、斯ういふことを申された「我が國の將來の石炭はやはり内地炭礦の増産に依存しなければならぬ。然らばどういふ増産かといふに、内地の消費が一直線に近いカーブで年々増加するやうに増産の方のカーブも茲當分何年間是一直線に近く行くだらう。現に大

正の末から昭和の初年頃には我が國內の石炭産額は三千五百萬噸乃至四千萬噸が最高限度だと云はれてゐたものが、現在のやうに増産して居るから」と、これは實に驚くべき誤解である。

なる程、大正の末頃我が國の石炭鑛業に關係してゐた官民識者の意見として將來の内地の石炭産出最大重（無煙炭と炭坑自用炭を除き）三千五百萬噸乃至四千萬噸と豫想したのは事實であり、私の如きは其當時三千五百萬噸を限度とするとの意見であつたのであります。それが何故に今日に於て四千萬噸以上約〇割の増産を見るに至つたかといふに、理由は極めて簡單である。其一は大正の末から昭和の初年に石炭の大不況期に際會して、全國大炭坑は何れも減産を獎勵となすべく餘儀なくされた。此時機に於て炭坑技術者は根氣よき大努力により、從來我が國の炭坑内には應用不可能ならんとされてゐた機械採掘と機械運搬とに成功したのである。其二は炭坑内の採炭法に大改善を行つて切双集中といふことを實行したのである。此二つの石炭採掘作業上の劃期的改善が我が内地産出炭の急増加となつて顯はれたのであります。唯ここに注意を要するは、今日の内地産炭の品質が著るしく劣化し、大正の末から昭和の初年頃に比し約一割のカロリー減となつてをるのであるから、昨今の國內産炭量より無煙炭と自用炭量を差引き、其上にカロリー減を計算に入るとせば、其後の増産は別に驚異的のものではないのである。石炭に關係ある幹部の方でも此邊に理解が出来て居らぬやうでは、石炭に直接關係のない人々は、たとへ有識者であつても、石炭問題に正しき理解を與へて貰ふといふことは難かしいと思つて實は心配してをるのであります。これはどうしても石炭問題の本當の理解を得てもらつて、日本内地の石炭の増産の程度は凡そどの位だといふところの見當をつけて行かなければ、現在の石炭對策は勿論、將來の我が國の石炭對策の解決は出來ぬと思ふ。

第二は、これに關聯してをりますが、内地の石炭鑛業に向つて將來の増産力を過信しては困るといふことである。東亞

には可なり澤山の石炭の埋藏量があるのであるが、今日印度とソビエトを除いた東亞の石炭の埋藏量から言へば、我が國の石炭埋藏量は約四・五パーセントであります。即ち東亞の石炭は我が國の二十二倍あるのである。而して我が國內の生産はどうかと申せば東亞の五割一分を占めてをります、それから印度を假りに加へたらどうなるかといふに、埋藏量は約三・八パーセントさうして生産量は約四割強であります。さうするとつまり東洋の石炭から申すと日本内地の埋藏量は極めて貧弱であるに拘らず、現在非常に澤山の石炭を掘り出してをる。我が國は残り少なき頗る心細い巾着から思ひ切つて金を出して消費してをるといふことなるのであります。東亞共榮國の石炭の大金庫から見れば、僅か百分の四しかない小金庫の中から、夫れも自分のためだけにでなく、東亞共存共榮のために其費用の半分の金を負擔し支拂つてをるといふ理窟になる。参考のため石表を掲げます。

東亞の石炭埋藏量と産炭（日滿支石炭時報を参考とす）

	埋藏炭量	産出炭量（昭和十二年）
日本	二〇〇	五、〇〇〇（概算）
滿洲	二〇〇	一、四〇〇
支那	二、三九〇	一、五〇〇
佛印	二〇〇	一、三〇〇
舊蘭印及比律濱	一四	六六
印度	七八〇	二、五四四
濠洲	一、四八〇	一、五七一

馬來半島

一

六四

ニュージールランド

二二

三六四

合 計

五、二八七

一一、七三九

これを以て見ても我が國の石炭の生産は埋藏量に比して過大である。世界無比の大なる生産比率であるといふことが解る。この無理な増産をやつてをるのをいふことにして、今後何年も今のやうな増産比率で石炭を出せといつても、これは出来ない。私はこの點からして常に内地の石炭増産力を過信しては困るといふことを主張して居るのであります。凡そ峠が見えてをる、峠は近い。峠の先は下り坂になるといふことを知つて貰はねば困るのであります。

第三は、さうするとつまりどうなるか、我國は大東亞共榮團の盟主として將來石炭の消費量は益々多くなる、一方國內の増産には限度があるといふことから、結局我が國の石炭政策は増産主義を捨て、大輸移入方針をとる外に方法はないといふことになるのであります。即ち大々的に外地、大陸、南洋より石炭をとり入れる外に將來の我が國の石炭政策は見出せないであります。(イ)、現に樺太は内地のために非常に骨を折つてくれて、現在最も有力なる石炭の貢獻者であるが輸送力さへあれば今後當分此増産移入は續けることが出来るのである。(ロ)、次は滿洲炭の増産奨励である。滿洲炭の増産に必要な物資はどしどしやる、資本が要るなら融通する、技術者がいるならやるといふことにして、滿洲炭を増産してもらふ。その代りに増産の一部はどうしても内地に輸入してもらふ、今後は内地にもつてくることを目的の一として大いに増産計畫を立て、貰はなければならぬ。

滿洲は内地よりも増産力は著るしく強いのであります。埋藏炭量は今日約二百億噸と推算されてをるが、まだ多くなると思ふ。假りに内地の埋藏量と同じとしても其埋藏量には力があります。内地の埋藏炭を私のやうな六十八のお爺さん

んに例ふるなれば向ふは二十代の青年である。これを見ても滿洲の増産力は頼りになる。現今は滿洲炭の輸入は減じて居るが、昔しは撫順炭だけで三百萬噸近い大量を持つて来て内地の石炭業者を困らせたといふやうなこともあつた。ある時は内地の工業中心地帯の所要石炭は、將來撫順の粉炭を以つて賄ひ得るといふやうな宣傳もされた。然るに昨年の如きは僅かに其當時の〇分の一位の輸入にしかかつてをらぬ。今後は一つ奮發を願つて、どうしてももつと多く輸入して貰はねばならぬと思ふのであります。私がかくも強情に滿洲に御願ひするのは、一は後に述ぶるところの運搬關係からでもあります。(ハ)、次は北支及び蒙疆の炭田の大々的開發によつて採掘された石炭をどしどし我が國に輸入することである。支那の炭田が將來我が國に向つての石炭供給の主要地であることは私から申すまでもないことであり、實に於ても量に於ても、恐らくは永久に我が國への石炭供給の本場となるものと思ふのである。その石炭開發の順序に就て私は意見がある。夫れは北支及蒙疆の石炭は、大物であるだけそれだけ開發の順序方法も大きく考へてかゝらねばならぬと思ふ、即ち百年の長計を以てかゝらねばならぬと考へるのであつて、拙速主義で行くことはいかぬ、左ればとて今日の我が内地は是非ともある量の輸入を絶対に必要とするのであるから、差し當り先づ近い所、運搬し易い所、内地に持つて來易い所に於て、炭質に考慮を加へて開發を急ぐこととし、港灣に遠き奥の方はこゝ暫らくは支那内地の自用炭程度の採掘にとゞめ、山西方面の石炭の内地供給に向つては拙速を算ばず、大きな計畫を以つて進むといふことにしなければならぬと思ふ。而して其大きな計畫といふのは後に申すところの海陸運搬の大計畫に伴つての石炭採掘といふのであります。(ニ)、その次は南洋方面に向つてあります。南洋方面で石炭埋藏量の豊富なるは何んといつても濠洲である、石炭の點からしても濠洲は是非とも我が東亞共榮團の仲間に入れなければならぬ、しかしこれは私だけの意見でありますが、大體に於て南洋方面の石炭は今ほ餘り急いで掘廻さぬこととし、先づ石油、鐵、銅、滿鐵、ボキサイトといふやうな南洋特種の天産物に先陣をお譲

ひして、石炭に向つては此際南洋各島の共通的自給自足にとりて、一方に於て大々的に炭田調査を進める、しつかりした調査をするといふことにするのがよからうと思ふのである、併し運搬その他の關係上、樺太、滿洲、北支だけでは、まだ内地への石炭の供給は不足と思ふので、佛印の炭田だけは此際急いで開發をする必要がある、また急いで役に立つのは佛印の石炭であると思ふ、佛印の埋藏炭量は約二〇〇億噸で左程多くもないが、それでも我が國內の埋藏量に比敵し、しかも其過半はホンゲイを主として東部海岸に近くあるのであるし、炭質はよし、コークス用にも化學用にも家庭用にも適し、現に數年前八十萬噸も我が内地に輸入したこともある、その佛印炭田の開發擴張を急いで、どしどし我が國に輸入する、内地で餘れば、朝鮮に持つて行き、朝鮮の無煙炭を滿洲の家庭用炭として持つてゆく、そうしてそれだけの滿洲炭を餘計に日本に持つてくる、石炭の融通は幾らでもつく、多々益々辯ずであるから一番着手し易いそうして運搬の便のよい佛印の採掘を大急速に擴張するがよいのである。

以上申述べたやうにしなければ、内地の今後十年の石炭對策即ち石炭の需給計畫は満足に立てられぬのである。十年先に内地だけで今日の二倍位の石炭を消費せぬやうでは困る、またそのくらゐの石炭が内地に供給できぬやうでどうしますか、それでは日本は大東亞共榮團の盟主たることは出来ない。十年後にはどうしても内地の生産量と同じ量の石炭は海を越へて持つて來るといふことは判りきつた計算である、はつきりした數字だと思ふのであります。

唯茲に問題となるのは運搬問題——港灣設備を含んだところの海陸の輸送問題が極めて重大であります。たゞ一口に石炭の運搬といふと簡單のやうであるが、先日某所の會合で燃料局關戸技師の申されたやうに石炭の百萬噸といふとその容積にしてざつと、丸ビルの四倍あるのであるが、何千萬噸の石炭を何千哩運ぶ輸送といふことが如何に大仕事であるかは世人の想像外であると思ふ。石炭は運ぶ方に比べれば寧ろ掘る方がこれからは樂ではないか、運ぶ方が負けはせぬか、今

後は炭坑内の採掘が海陸の運搬に勝つと思ふ、海運なくして島國の内地は石炭を得ることは出来ない、今後は寧ろ掘るよりも運ぶ方が大事だ。運搬施設が出来上るまでは一足半歩遅れて掘つてもいゝといふくらゐである、私は斯う思つて居る假りに近き將來に五千萬噸の石炭を海外から運んで來るとすれば、五千萬噸級の船腹一萬隻を必要とする。これは一日に二十七隻四といふ船腹になる。假にこれを三十隻としますと、こちらで一日に三十艘の石炭を荷揚げし、向ふでも一日で三十艘の石炭を積込まねばならぬから、それで六十艘の船が必要となる。假りに航海日数を四日とすれば往復八日間、それで二百四十艘。それから船がついても荷役が出来ずに待つてゐる、此荷役待ちを向ふとこちらで二日づゝとすれば、これで百二十艘、その合計四百二十艘となります。船の方の經營家の話では、船の約一割は修理其他で休航することであるから、それを四十艘とすれば、四百六十艘の船が必要といふことになるのであります。一方これはある船の會社の人の話であるが、滿洲、樺太、北支那即ち内地を中心とする東亞共榮團の北半の區域を平均して一月に何航海出來るかといふと、先づ二航海だらうといふ。それから計算すれば、四百艇になる一割の休航とすれば四百四十艘となる、兩方共似た數字が出て來るのであるから、どうしても今後約十年の間に石炭の輸送船だけに五千萬噸級の貨物船四百艘が必要になるところで今日の内地造船所でこれだけの船が建造出來るか、出來ても出來ぬでも是非造つて貰はねばならぬ、しかもこれは、石炭輸送船であつて、我が國としては今後十年のうちには少くともこれと殆んど同じ數の船が鐵礦と油とに向つて必要であると思ひます。同時にこれらの船を荷役する港灣の施設を、是非とも必要とする、私が先年仙臺市に於て松島大國港論と其附近に大造船所建設の必要迫るを説いたのは決して一の空論ではないのであります。私はこれ等の無數の船大船をして大東亞の海上を縦横に航行せしめ、それによりもたらず天然資材を我が國內にて製品化し、其製品を次便に來る輸送船の復航に満載し輸出することにより、そこに初めて大東亞の共榮があり共存があり得るのだと思ふ時、一に船、二



に船、三にも船と云ふ言葉は、前世界大戦當時のロイド、ジョージの寢言にあらず眞に我が國に向つて一番あてはまる。

新聞の報ずるところによれば、最近經濟聯盟では我が國には約千五百萬噸の船腹がなければいかぬといふ數字を擧げて政府に具申されたやうであります。イギリスは二千萬噸の船を擁してゐて、その中で約七百萬噸をやられたが、中立國及び敵性國の船を分捕つてゐるから、今尙千五百萬噸近くの船は持つて居る筈である。我が國が今後千五百萬噸を増しても獨、伊にやられつゝある今のイギリスと同じではないか、この位の船を我が國が必要とするのは當然である。現在の船腹から見れば尨大なる船數のやうであるが、私は經濟聯盟の此具申は、玄人が餘程詳しく調べて出した數字だと思つて、非常に愉快に感じて居るのであります。此船なくして我が國の石炭問題がどうして解決出来ますか、港灣鐵道の大施設なくして石炭問題がどうして解決出来ますか、また鐵問題、油問題の解決がどうして出来るかと思ふのであります。

政府當局に於ても此點に留意せられ、七五噸、一五〇噸、二五〇噸の中型汽帆船建造の企畫あるやに最近の新聞は報じて居るが洵に結構のことである。私は今一步を進めて二五〇噸以上五〇〇噸級の大型汽帆船をも大急造して此海運上の危機を突破する必要があると考へる。太閤秀吉朝鮮征伐當時の古智に倣ふではないが、全國の沿海各府縣に此汽帆船の建造を強制割當つるも一方策である。而してこれに要する主要材料たる木材は國有林並びに御料林の一部拂下を請願するといふところ迄行かねばならぬかと考へる。茲に問題は造船大工と船員の不足といふことになるが、造船大工は専門大工の下に普通の建築大工を徵用する事とすれば徐々に補充出来る。船員の大不足は相當困難なる問題であるが、これは海國日本のことであるから各地方より老船頭を徵用し一方各府縣に簡易商船學校を設立して急養成をなす外に方法なしと思ふ、それからこの木造船の建造は、大東亞共榮圈内何れの地域に於ても盟主日本の指導下に建造に着手すべきは當然である。斯くして太平洋上至る所に日の丸を揚げた日本船の航行を見るに及んで、東亞共榮圈の基礎が確立せられ、茲に軍備と相まつて東亞の守り固しといふことが言ひうるのであります。(論者は元明治鑛業株式會社常務取締役現石炭統制會評議員)

419  
245

昭和十七年四月二十日印刷  
昭和十七年四月二十五日發行

非品賣

鎌倉市大町西町九一二  
著者 石渡信太郎  
小石川區茗荷谷町十九  
發行者 倉田 潮  
牛込區早稻田鶴卷町四〇三  
印刷者 勝畑貞一郎

終

